L2J/L2

本科１期６月度

解答

Ｚ会東大進学教室

高２東大国語

高２東大・京大国語

8章

【問題】（演習）

出典…丸山眞男『日本の思想』～Ⅲ・思想のあり方について　／　オリジナル問題

文章略解

解答に同じ。

解答

近代西欧の個別科学は、それ以前の包括的学問から、各分野に共通の文化伝統を背景として十九世紀後半に専門分化して成立した。近代日本の社会や文化一般にも同じ傾向を見ることができるが、日本の科学研究は近代西欧の専門分化した形態のみを導入し、その基盤となる文化伝統や各分野に通底する基本的認識への理解を欠いたため、個別の専門分野の枠内の作業に終始し、他の分野との関わりを考えないのが普通の状態となってしまった。〔200字〕

【問題】（自習）

出典…大庭みな子『女の男性論』／オリジナル問題

文章略解

本当に必要な「他人の眼」とは、自己の主張を対象化して考えるということである。人々は「個」を単位とし、対等な地球人である。それぞれの地域社会で周囲と協力して生きていく。その際、相互理解の基準となるのは人間性である。「他人の眼」＝「人間の眼」で自分を眺められる人なら、共同社会を成立させるための自己主張の限界も見えるはずである。自律的な「他人の眼」とは、一個の人間が人間性を基準にして抱く素朴な感覚である。

解答

問1　A　世間の眼　　B　人間の眼

問2　A　周囲に合わせるため、他人の作ったルールである習慣に従順であることを要求するものである。周囲の人々のきわめて主観的な、あやしげな権威なるものにそう思い込まされた、実体のない価値基準によるものが多い。

B　個人の確立に基づく自律的なもので、人間性を基準にして抱く素朴な感覚である。自己主張を対象化し、共同社会を成立させるためにその限界をも見い出し得るもので、自由かつ協力的に生き続けるために必要である。　〔いずれも解答例〕

解説

問1　二項対立を整理して、図式化していく練習である。この文章では、同じ「他人の眼」という語句が、二種類使い分けられている。同一の語句に正反対の意味がこめられているので、整理して押さえないと紛らわしい。

二項対立の基本は、「肯定・主張」対「否定・批判」である。傍線部Aは、「いかに無意味であり、滑稽であるか」と述べられているように、筆者から否定・批判されている。傍線部Bは「ほんとうに必要な」と連体修飾で説明されているとおり、筆者から肯

定・主張されている。そして、傍線部Bを含む一文「ほんとうに必要な『他人の眼』とは習慣に従順であることを要求する世間の眼ではなくて、……」から、傍線部Bと「世間の眼」が対立することがうかがえる。傍線部Aと傍線部Bとが対立し、傍線部Bと「世間の眼」とが対立するわけだから、否定・批判されているもの同士として、傍線部Aと「世間の眼」とが結びつく。

続いて、筆者によって肯定・主張されている傍線部B「眼」だが、これは第四段落で「『人間として』生きつづけるなら、『他人の眼』とは当然『人間の眼』である。」という具合に出てくる。「『他人の眼』とは当然……である。」という表現も重要だが、「人間の眼」の「眼」という語に着目することも大切である。これは、筆者により肯定・主張されているものとして、傍線部Bと結びつく。「『他人の眼』＝『人間の眼』で自分を眺められる人なら、……」という部分を取り上げても同じことが言える。

問2 各段落毎に、二項対立に整理して趣旨を押さえていこう。

第一段落は、第二段落冒頭の「こう考えてくると、」で受けられる、前提としての例証にすぎないが、「肯定・主張」対「否定・批判」の対立の図式は明確である。前者は「ほんとうのエチケット」「そういう本来の精神」と述べられているもので、「人間と人間がつき合っている間に自然に生まれた、必要なルールであり、人間の心と心のふれ合いをスムーズにするための思いやりであり、礼儀である。」と説明されている。後者は、「ボーイのサーヴィスの良否にかかわらず、参考書に記入されている通りの額を、機械的にチップとして置くというやり方しかできない」「他人の決めた法則に従うしか能のない」「自分の判断のない、常に右や左の人と同じやり方を真似るしかない」と述べられている。ここの話題はあくまでも「エチケット」という例だが、前者が傍線部Bに、後者が傍線部Aに対応する。

第二段落は、傍線部そのものが出てくる段落であるから、重要である。「習慣に従順であることを要求する世間の眼」が傍線部Aと結びつくことは**問1**で見たが、「ほんとうに必要な『他人の眼』とは……自己の主張を対象化して考える、ということである。」という言い回しから、「自己の主張を対象化して考える」が、傍線部Bと結びつく。「多くの人びとが無意味に思い煩い、気にしている『他人の眼』とは、その実、周囲の人びとのきわめて主観的な、妖しげな権威なるものにそう思いこまされた、実体のない価値基準によるものが多いから、そんな『他人の眼』の支配を受ける必要はさらさらない。」は、「無意味に」「必要はさらさらない。」などと否定・批判されていることからも、傍線部Aと結びつく。

第三段落は、「『国際的』とか『国際人』とかいう言葉」がテーマである。「国を単位として考えたもの」対「人間とはすべて

『個』という人間が単位であり」という考え方が、核となる二項対立である。前者が否定・批判されていて傍線部Aに対応し、後者が肯定・主張されていて、傍線部Bに対応する。

第四段落は、**問1**で見たとおり、傍線部Bと結びつく「人間の眼」が出てくる以上重要である。この「人間の眼」の説明である「人間が自由に、しかも社会で協力的に生きつづけるための、厳正な眼である。……共同社会を成立させるための自己主張の限界も見えるはずである。」は、傍線部Bと結びつく。「昔、思いこまされた、歪められた、奇妙な基準による、催眠術にかけられた眼ではなく」「決して他人のつくったルールに従うことでもなければ、周囲に色を合わせる保護色を選ぶことでもない。」と否定・批判されている箇所は、傍線部Aと結びつく。「自己を主張するためには、……」以降は、「……ということであり、……ということである。」という文末表現から、主張・肯定されていることがわかる。傍線部Bと結びつく。

最後の第五段落も、「他人の眼」を話題にしているから重要である。肯定・主張されているのは「自律的な『他人の眼』」。「自律的な『他人の眼』とは……人間が、一個の人間が、人間性を基準にして抱く素朴な感覚である。……」と述べられているが、こちらはもちろん傍線部Bと結びつく。「習慣的に強いられた思考方法による批判ではなくて、」と否定・批判されているほうが、傍線部Aと結びつく。

以上のうち、「他人の眼」と直接の関わりを持つ第二・四・五段落から、それぞれ説明に適当な対応箇所をピックアップしてまとめる。

9章

【問題】（演習）

出典…長谷川眞理子『ラップトップ抱えた「石器人」』／一橋大学　04年

文章略解

解答に同じ。

解答

現在の高度な科学技術は、人類の知恵の蓄積の結果であるが、それ自体としては進化していない人間の脳の処理能力を超える情報を氾濫させ、感覚的把握を越える事態を現出させてもいる。脳の処理能力と現実との落差に対する無自覚が、科学技術のはらむリスクへの認識の甘さを生み、深刻な重大事故の発生の一因となっている。高度な技術に、石器時代と変わらない脳をもって対峙しているのだという自戒が、現代の我々には必要である。《解答例》〔199字〕

【問題】（自習）

出典…福田歓一の文章　／　立教大学・改題

文章略解

問２《解答例》に同じ。

解答

問１　**第一段落**　権力の概念が、その極限に「最後の手段」として物理的な力を内包するかぎり、物理学の述語としての力の概念を借りて権力現象を説明しようという試みには、それなりの理由がある。《解答例》〔83字〕

第二段落　権力は人間と人間の間についてだけ認められるもので、そこに問われるべき問題は、社会＝政治的な力に固有の問題である。《解答例》〔56字〕

第三段落　権力は何らかの権威なしに成り立つものではない。権威と暴力行使の威嚇との両極の間に利害関心に訴える服従への誘因が関わる形で、権力関係は人間世界に遍在している。《解答例》〔78字〕

第四段落　現実の権力関係では、主体も客体も複数であり、ある生活領域について成り立つのが通例であるため、数多くの権力関係に濃淡様々な密度がある。《解答例》〔66字〕

問２　権力の概念が物理的な力を内包する限り、物理学の力の概念からの類推も成り立つ。が、権力は、人間と人間の間にのみ認められる社会＝政治的なものだ。権力の成立に何らかの権威は不可欠である。そこに広い意味での利害関心に訴える服従への誘因も関わって、権力関係は人間世界に遍在している。現実の権力関係では、主体も客体も複数であり、ある生活領域で成り立つのが通例である。そのため、数多くの権力関係に様々な密度がある。《解答例》〔200字〕

解説

問1　各段落の文章構成から、核となる部分をピックアップしてくる練習である。

第一段落　3行目の「……看做されるようになったから」までは、前提及び理由説明である。それに続く「十八世紀以来権力を論じる学者たちは、しばしば物理学からその述語としての力の概念を借りて、権力現象を説明しようと試みたものである。」の部分も、それ以下を支える例証である。また5行目の「特に物理的……」以降も、「国際政治について」という例証の部分である。したがって、これらの部分に支えられた「権力の概念が、その極限に『最後の手段』として物理的な力を内包するかぎり、このような類推や比喩にはそれなりの理由があり、」の箇所が、この段落の核ということになる。後は「このような類推や比喩」という語句の指示内容を「しばしば物理学からその述語としての力の概念を借りて、権力現象を説明しよう」から押さえて解答を作る。

第二段落　冒頭から続く「もちろん、……限界があり、……を意味することはない。また……を指すこともあり得ない。」までは、否定である。続く、じゃあどうなんだ、という肯定の部分が、筆者の言いたいことである。「権力は明らかに人間と人間の間についてだけ認められる。」の一文である。その後に続く「最も典型的な例をあげれば、……」以下は無論例証。これを受けて「そこに問われるべきは、……社会＝政治的な力に固有の問題なのである。」とくる。ここも筆者の主張。

第三段落　前半部分は、イエスの例を含んでの、甲乙二人モデルという前提である。これを受けて、「最も極端な場合にさえ、権力は何らかの権威なしに成り立つものではない。……ましてこの両極の間に、後に権力の手段として見るような、ひろい意味での利害関心に訴える服従への誘因をもちこむならば、権力関係はまさに人間世界に遍在していると言ってよい。」という筆者の主張がくる。続く「それは主人と奴隷、……」以降はその例である。

第四段落　第三段落での「二人モデル」を「極端な抽象」とやっつけておいて、「現実の権力関係では、主体も客体も複数であるのが普通であり、また権力関係が……ある生活領域、ある範囲について成り立つのが通例である。」と、話を「現実の権力関係」の方に持ってくる。この部分を「そうだとすれば、」で受けて前提とし、「人間のむすぶ数多くの権力関係に濃淡さまざまな密度のあることも自然であろう。」と主張する。これがこの段落の核である。「一般的には……」以下はその例証である。

問2　各段落の趣旨を、指定字数に合うように短縮しながら羅列していけばよい。因みに範解では、「権力の概念が物理的な力を内包する限り、物理学の力の概念からの類推も成り立つ。」が第一段落。「が、権力は、人間と人間の間にのみ認められる社会＝政治的なものだ。」が第二段落。「権力の成立に何らかの権威は不可欠である。そこに広い意味での利害関心に訴える服従への誘因も関わって、権力関係は人間世界に遍在している。」が第三段落。「現実の権力関係では、主体も客体も複数であり、ある生活領域で成り立つのが通例である。そのため、数多くの権力関係に様々な密度がある。」が第四段落に対応している。

10章

【問題】（演習）

出典…外山滋比古の文章　／　法政大学　09年

文章略解

文学作品は、それが発表されたばかりの時点では時の流行や作品自体の時代性によって正当な評価を与えるのは難しい。時間の経過と共に流行や時代性などの一時的な要素が風化し、忘却されることではじめて正当な評価が与えられ、なお読まれ続けているものが古典となる。同様に、人間の思考も、新たな着想が時間の経過と共に再検討され、一時的な要素が風化し、忘却された結果遺ったものが、永続的で不変の認識を形成してゆく。

解答

問1　これを自然　　**問2**　A＝文学史　B＝生木

問3　《ア》　　**問4**　1＝B　2＝A　3＝A　4＝B

問5　時間をおいて新たな着想を再検討し、一時的な思いつきにすぎない要素を淘汰してゆくことが、永続的で不変の認識を得るために必要な過程である。〔67字・解答例〕

問6　イ

【問題】（自習）

出典…小林秀雄「―金閣焼亡―」（『無常といふ事　モォツアルト』所収）／東京大学　74年

文章略解

画家は、信頼し尊重する先人の思想をよく理解したいと思い、その画を模写する。美術史とは、そうした模倣の歴史である。画題が人間から自然に代わるには長い歴史を要したが、それは今日の画家の苦心の内に圧縮されて存する。画家は、人間との交際が教える関係を自然との間に結ばなければならない。自然を愛し、信じる事を学ぶのである。画家に理想を教えるのは、手本たる名画である。他人への信頼と無私な行動が、個性を育てる。

解答

問1　2　　問2　3　　問3　2　　問4　3

解説

問1　「自分の自然的な形を追う」も「自分の人間的な形を追う」も文脈上おかしな表現だから、まず3と4は落とせなければいけない。問題は、1か2かだ。二箇所目の空欄を含む、文章末尾二文を見てみよう。

> 名画というモデル、名画という思想　⇩　この［a］を教える
> 他人への信頼と無私な行動　⇩　一番よく自分の個性を育てる

こうして見ると、一見解答は「1　個性」になる。が、この設問は、こうした、近場での部分的機械的な処理だけではすまない。解答を導くテクニックは、あくまでも論旨把握に則った上でなければならないことを、この設問は教えてくれている。解答の根拠箇所を挙げるだけの説明の危険性を、と言ってもいい。

第二段落冒頭に「手本に頼るな、自然から描け、個性を重んぜよ、という所謂自由画教育の主張は正しい様に見えるが、よく見ると一種の思い付きに過ぎない。」と書いてある。むろん、こんな遠い箇所を解答に挙げて、先に挙げた近場を黙殺するわけにはいかない。しかし、ここで言う「手本に頼るな、自然から描け、個性を重んぜよ、という所謂自由画教育の主張」への批判は、この文章全体を通じての筆者の主張である。この主張と筆者の主張との二律背反を骨格として捉えた上で、どちらの箇所が重要かを判断しなければならない。

筆者の主張は、「手本の模倣」にある。少なくとも芸術家の意識レベルでは、これがその出発点に置かれる。それが結果的に、敢えて言うならば無意識的に、芸術家の個性的な対象把握、自然把握を導く。彼はそう言いたいのだ。最初から「個性」を目指しても、「個性という様な空漠たる概念を、どう扱っていいか知らないし……」（第二段落）というようなことになる。

もしも、「モデルを描き乍ら、自分の個性的な形を追う事が出来なければ、……」であれば、最初から意識的に「個性」を目指すことになってしまう。また、このモデルは事物としてのモデルであって、「名画というモデル」とは対立する概念だ。

芸術家は、「名画というモデル」「名画という思想」すなわち「手本」から自分の「理想」を教えられ、その「理想」を追うことが、結果として（芸術家の意識レベルを越えて）「個性」に繋がる。以上のような趣旨である。ここで最初に挙げた文章末尾の部分に立ち返ろう。「自分の個性」にではなく「他人への信頼と無私な行動」に重点が置かれている。そう考えれば、「1　個性」が誤りであることがわかるだろう。

問2　1.「美術史が模倣の歴史であることを自覚し」ているのは、筆者小林秀雄であって、芸術家のほうではない。芸術家は「信頼し尊重する人の思想を、よく理解したいと思う」だけだ。

2.「自己の個性を自覚し」が、先に述べたテーマに反する。

3.　文章末尾の趣旨に連なる。

4.「手本に頼らず」が、2同様先に述べたテーマに反する。

問3　まず本文16行目を見よう。

（否定）　自然は、ただ与えられてはいない、
（肯定）　私達が重ねて来た見方のうちに現れるのである。

筆者の言いたいことで、それを受けて次の部分が来る。

画家は、人間との交際に似た、或は人間との交際が教えた或る種の関係を自然との間に結ばねばならぬ。
←
α　そういう関係のなかにしか、
⇩ β　画家にとって、自然は、いやあらゆる対象は対象たる意味を持たない。
→
〔擬人法〕
α　こちらに口を割らせる術がなければ　⇩ β　自然は……何事も語りはしない。
〔例〕β　美しくも醜くもない。

敢えて言えば、実体概念に対する関係概念の問題とも見なせる。自然の側に実体としての意味が初めから存在しているのではなく、画家の側の関わりが自然のあり方（見え方）を決定する（更に言えば、それが、画家の側のあり方、個性の決定にまで繋がる）というわけだ。

1．これでは実体概念。自然の側に最初から美という意味が存在していることになる。
2．「客観的に与えられているのではなく」で実体概念の否定を行い、「見る者の見方によって美や醜として現われるものだ」で関係概念を主張している。
3．「自然」が「個性の秘密」について教えてくれる、などとは書かれていない。

4.「自然」が「人間」について語ってくれる、などとは書かれていない。

問4「天才少年画家」云々というのは、「手本によらず、モデルによって描く流行は、真の画家の仕事を少しも容易にはしていない。」の例として持ち出されている。「怪物」という言葉にも、その批判の意図が読み取れる。1「期待」2「讃美」は、その点で誤り。3か4かについては、先に挙げた箇所で3「真の画家」は主題とされているが、4「大画家」など問題とされてはいない点から明らかだろう。テーマの点から考察しても、この「天才少年画家」は、「手本に頼るな、自然から描け、個性を重んぜよ、という所謂自由画教育の主張」の側に属する。筆者はこの主張を否定して、「名画」を「手本」とする「模倣」の延長線上に「個性」が生まれることを主張する。**問1**で見た二項対立だ。出発時点から既に「個性」を有しているような「天才少年画家」の存在は、筆者からすると「自由画教育の主張」同様否定されねばならない。二項対立である以上、4「軽視」は当たらない。3「否定」でなければならない。

L2J/L2
高２東大国語
高２東大・京大国語

Z-KAI

会員番号	

氏　名	

不許複製